平成20年9月30日

# うがい事業とうがい器の変遷

サラヤ株式会社

1961年　「キャップがコップになる」うがい薬コロロ発売【下写真（一番左）】

1960年代　高度経済成長で大気汚染等の公害問題が深刻になり、四日市喘息（ぜんそく）
光化学スモッグ等が社会問題化。
→ 集団（官公庁・学校・事業所等）でのうがいをどうするかテーマに
（簡便に、衛生的に、安価に）

1966年　コロロ自動うがい器発売【下写真（左から2つ目）】
→ 発売後、すぐに次々と採用される。
大手官公庁、事業所、学校等で次々と採用決定
→ 当時、新聞等で再三採り上げられる【下写真（右側2つ）】

コロロ自動うがい器の画期性　→　次ページへ

1977年　ソ連カゼの大流行
一気に、官公庁での感冒対策機器としての設置が拡大。
（その後、2～3年に一度、新型インフエンザ大流行）

1983年　お客様へのサービス向上と薬事法遵守のために、機器サービス部門を創設。
主に薬液補充と機器メンテナンスを行う。　→　全国にサービス網を構築

1989年　水道器具として（社）日本水道協会から、自動うがい器としては日本で
初めて型式承認を受ける。

2003年　SARS感染症の流行によりうがいの必要性が再認識される
厚生労働省が予防法として推奨

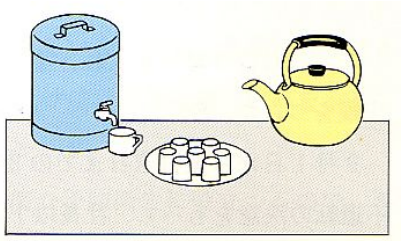
2007年　国を挙げての新型インフエンザ対策の中で、うがいの必要性が個人衛生で認められる。
H19.3.26 厚生労働省・経済産業省ガイドライン　参照

【ご参考】コロロ自動うがい器の画期性

集団でうがいを行う場合の比較

| | 昭和 30 年代のうがい（図） | コロロ自動うがい器によるうがい |
|---|---|---|
| うがい薬を希釈する手間 | あり | なし |
| うがい薬の希釈率 | ヒトによりバラツキ | 自動適正希釈（80～100 倍） |
| （希釈液の）変敗の恐れ | あり | なし |
| 異物混入の恐れ | あり | なし（施錠管理できるため） |
| コップの共用 | 非衛生的 | しない |
| コップを洗う手間 | あり | なし |
| 収納性・見た目 | 場所をとる | すっきり収納 |

図



1975年「CO-FF 型」の販促物より

以 上